研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-740		20-082	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　三浦克之

題名（原題／訳）

Drinking Patterns and Risk of Ischemic Stroke in Middle-Aged Adults: Do Beneficial Drinking Habits Indeed Exist?
中年成人における飲酒パターンと虚血性脳卒中のリスク：有益な飲酒習慣は確かに存在するのか？

執筆者

Yang W, Kang DW, Ha SY, Lee SH.

掲載誌

Stroke. 2021 Jan;52(1):164-171. doi: 10.1161/STROKEAHA.120.032144.

キーワード	PMID
飲酒、脳梗塞、飲酒行動、脳卒中	33148143

要　旨

目的：飲酒量は虚血性脳卒中と J カーブに関連すると報告されているが、飲酒パターンの違いがこの関係に影響を与えるかどうかは不明である。高い割合で飲酒する中年は、高血圧や糖尿病など血管の危険因子から虚血性脳卒中を発症する可能性が高い。目的は中年期の虚血性脳卒中における飲酒パターンの影響を明らかにすることである。

方法：韓国の国民健康保険に基づく代表的な大規模コホート（NHIS-NSC）から一般健康診断を受けた 40～64 歳のデータを用いた。5 つの異なる飲酒パターンは、毎週の飲酒頻度と機会ごとの飲酒量に飲酒者リスクを組み合わせて定義した：飲酒しない禁酒者、飲酒者グループ I;≤30g/日および<5 日/週、飲酒者グループ II;≤30g/日および≥5 日/週、飲酒者グループ III;>30g /日および<5 日/週、飲酒者グループ IV;>30g/日および≥5 日/週。Cox 比例ハザードモデル使用し、飲酒パターンと虚血性脳卒中の発生との関連を分析した。

結果：最終的な解析対象は合計 152,469 人だった（平均 50.2 歳,男性 72,285 人[47.4%]）。追跡期間の中央値は 9.0 年だった。ベースラインから最初の 7 年間、禁酒者と比較して 5 日/週未満（飲酒者グループ I および III）は虚血性脳卒中のリスクが有意に低かった（グループ I ハザード比 0.71 [95%CI,0.59–0.85];グループ III ハザード比 0.80 [95%CI,0.68–0.93]）。一方で他の飲酒者グループはそのような違いを示さなかった。ただし、虚血性脳卒中のリスクに対する飲酒パターンの影響は、最初の 7 年が経った後に弱まった。

結論：虚血性脳卒中に対する特定の飲酒パターンの有益な保護効果は、中年期では一過性となる可能性が示唆された。医師は、これまでほぼ確立された適度な飲酒の有益な効果に加え、飲酒パターンと虚血性脳卒中との長期的な関連を考慮して、臨床診療での患者教育に注意を払う必要があるかもしれない。